

日本文化における「声」

Gudrun GRÄWE

Resumé

As Japanese speakers use different voices depending on where they are and for what purpose they speak, it can be said that human voice plays a very unique role in Japanese culture. Intentionally changing one's voice and imitating voices is especially elaborate in Japanese performing arts.

In everyday life as well there are many unique ways of using one's voice, for example soliciting calls of salespersons and announcements in railway stations and trains. The speakers create special business characters and roles, and their voice differ from their natural voices. Japanese women often use high-pitched voices to demonstrate politeness and/or femininity.

There is also a remarkable omnipresence of voices, as the speeches of politicians and voices of vendors are transmitted by speakers in public spaces.

Literary works and etiquette books from ancient to modern times can provide a better understanding of stereotypes, ideals and the cultural background of the use of loud vs. small voice and high-pitched vs. low-pitched voice.

キーワード：声，声のピッチ，ジェンダー，女性語，裏声

1. はじめに

日本人は時と場合によって様々な声で話しており、「声」は日本の文化の中で独特の役割を果たしている。声を変えたり他人の声を真似たりするのはあらゆる文化の大衆芸能の要素であるが、声色遣いや物真似は日本で特に巧妙に発達していると言えよう。日常的な場面でも様々なユニークな声の使い方がある。例えば市場の売り声、デパートの店内アナウンス、駅や電車の車内アナウンスなどの声は「業務用」のキャラクター（定延 2005）を作ったり、「役割語」（金水敏 2003）を使い分けたりして、普段の自分の声とは異なる音質や独特のイントネーションの声がかきこえる。仕事や社会の期待やイメージや流行りによって、声や話し方のクセに悩む人が手にする発声や話し方のトレーニングの書物に見られるように、クセを治すために意識的に声を作り変えるのは当たり前のこととして認識されている。そして日本の女性は、人当たりを柔らかくしたり女性らしく聞こえたりするために比較的、高い声で話す¹⁾。

日本では個人の声の多様性だけでなく、政治家の街頭演説や移動販売業者などが町を車で

回るスピーカーが証明するように、生活環境における声の氾濫も著しい。これらの観察が今回の研究の出発点となる。

日本における「声」の出し方や話し方、その理想や文化的背景を探るために、古代からの文学作品、礼儀作法の書物や現代の発声・話し方のトレーニングの書物も参照して、理想的な声、大声・小聲や高い声・低い声の使い分けの社会文化的背景について考察したい。

初めて日本に来た外国人は様々な日常の場で不思議にうつることに出会う。自分の文化・社会には存在しない現象や物事など、あるいは存在していても現れ方や形態などが異なる現象やものに接して、異様な感じや違和感を覚える。好奇心が湧き、魅惑されることもあるが、場合によっては不快感や疎外感が引き起こされることもある。そのことを前提にして、2014年に日本在住の13名の（ドイツ、アメリカ、フランス、スイスから来た）外国人にインタビューを行った。インタビューの対象はある程度無作為に選んだ日本文化や社会に関する約10項目であった。その項目は全て筆者が初めて来日した時に違和感を覚えたり、特別に関心を持ったりしたものであったので、他の外国人にも似たような経験があるかどうか、そしてそれらのものをどのように受け止めるかという疑問がインタビューの出発点となった。

取り上げた項目は例えば、スポーツ、男女関係、空間の使い方、制服、日本人が考える可愛らしさ、和食や日本人の声の使い方などである。その際、具体的な質問をするのではなく、例えば「日本におけるスポーツといえば、あなたは何を思い浮かべますか？」のような質問をして自由に答えてもらった。

本稿で中心に置くテーマは「声」であるので、インタビューを受けた13名の「声」についての発言だけをまとめて紹介すると、全員が、日本人はよく作り声で話すということを挙げた。特に女性の声のピッチの高さが挙げられ（8名）、その高い声は不愉快（5名）、甲高い（6名）、明るくて感じがいい（2名）という発言があった。話す相手によって声が変わり、プライベート用の声と儀礼的ないし職業上の声があるという回答もあった（4名）。

インタビューを受けた1名は声の使い分けを「本音」と「建前」と関連して考え、建前の場では作り声で話し、本音で話す時は自然で本来の声が使われると答えた。そして話す相手の地位や年齢に応じて声が変わられ、そうした声の使い分けによって自分と相手の位置関係が表明されるとした。

また他の1名は日本人の声にはバリエーションが多く、とりわけ男性の声に地面から響いてくるような深さやボリュームがあると感激したという。その例として能の謡曲をあげた。

まとめて言えば、様々な印象があるが、インタビューを受けた13名全員が日本における声の遣い方については何らかのコメントを述べた。つまり、来日した多くの外国人は日本における声の使い方に何か特別であると思っている、という結論することが可能である。

ここからは、まず何故日本の文化における「声」に関心を持つようになったか、何故「声」というテーマを取り上げるかについて述べた後、これまでに他にも「声」がどのように発声・話し方のトレーニングの書物などで研究の対象とされたかについて述べることにする。その上で、「声」は日本の文化の中でどのような役割を果たしてきたか、どのような声が理想とされたかなどという問について考察する。そのために、幾つかの日本の文学作品や礼儀作法の書物を取り上げる。勿論、本稿の限られた範囲では全ての問に十分な解答を見出せるものではなく、一つ

の試みにすぎない。

2. 日本における「声」の使い方

日本における「声」が筆者の好奇心と興味をそそるきっかけとなったのは様々な声の使い方である。その幾つかの例を述べる。

初めて来日して一日目の午前中の体験であるが、泊まっていた部屋まで響く街頭の様々なスピーカーの声に驚かされた。話す内容をすぐに把握できるほどの日本語の聞き取り能力はまだなかったため、不安感すら覚えた。ひょっとしたらそれは間もなく起こる地震・噴火・突風・もしくは津波の警告、そしてただちに避難するような警告ではないかと心配した。スピーカーという媒体によって、全ての住民の耳に届くように流されるのであるから非常に大事な情報であると思った。後になって日本では住民の注意を引くために、スピーカー付きの車で走りまわる様々な業者がいると分かった。灯油・石焼き芋・物干し竿などを売ろうとする商人から、ちり紙交換や古い電気製品やオートバイなどを回収する業者までが街頭を往来し、スローガンや候補者の名前を呼ぶ選挙カーが特に選挙前になるとひっきりなしに街頭を走り回るのは異様な感じがした。

このように、至る所で、様々な目的のためにスピーカーで音声を流すのは日本独特の現象であると思われる。特に都会はスピーカーに媒介された人の声が溢れている。警察が引ったくりに注意するようにまたは自転車が盗まれないためにカギを掛けるように呼び掛けたり、消防隊が火の用心を呼び掛けたりすることもある。スピーカーは大体非常時や避けられない時にしか利用しないと思っている日本語の母語話者でない人は、スピーカーを使ったこれほど大量の種類が多いメッセージを聞くと、混乱することもある。

これ以外にも、不慣れな耳を驚かせる、聞きたくなくても殆ど逃れられない声の、数多くの例が浮かぶ。駅・ショッピングセンターなど公けの場での宣伝やアナウンスは世界中の都市で聞こえる。しかし、人間の間の直接のコミュニケーションではなく、一方的に何かを知らせる声として、街路中そして家の中などでも様々な機械から多種多様なメッセージが耳まで届くのは日本独特の現象であるに違いない。スピーカー付きの車が移動しながら流す声だけではなく、路地を通る托鉢僧の声も、火の用心を呼び掛ける住民の声も響きわたることがある。そしてトラックなどがバックする時には、女性の声が「バックします」と警告する。家の中でも人の声に出会える。湯沸かし器の温度を変えると、女性の声が何度に変えたか、知らせてくれる。

他にも注目すべき様々なユニークな声の使い方がある。一つは例えばスポーツの応援団の、観衆の声援の音頭をとる叫び声である。そして歌舞伎や相撲では観衆が大きな声でひいきの役者や力士に声援を掛ける習慣がある。相撲の場合はこうした声援は場に相応しく思われるが、演劇は静かに観るべきものだと考えている人には歌舞伎の掛け声は不思議な習慣である。

とりわけ日本のスポーツにはユニークな「声」の出し方が数多くある。相撲では、三種類のアナウンスの声を聞くことができる。力士の醜名、番付、所属の部屋や出身地をあげるマイクを使ったアナウンサーの鼻にかかった声、呼び出しの独特の節回し、そして行司の呼び上げと掛け声であり、それぞれ異なった雰囲気があり、抑揚や様式や調子が決まっている。

高校野球の場内アナウンスは丁寧に工夫した、ソフトで抑揚の幅の非常に広い声で選手の名前などを紹介する。そのアナウンス嬢はまるで主役を演じるように、前もってよく練習し、選手の名前の発音を工夫していることは注目すべきである。

高校生などがテニスや野球などを練習する時に、大きな声で「ファイト・ファイト」などを叫ぶ。それは皆が一斉に叫ぶのではなく、外から観察する人にとって分からない頻度やタイミングで各選手が声を出す。いつも誰かが叫ぶので、途切れることのない掛け声になり、虫の群れの鳴き声を連想させる。スポーツの種類や学校によって様々な種類の掛け声が存在している。

剣道では、相手に対する威嚇を奇妙な声で表す。その掛け声は自分の中に高ぶった気合が自然に大声となり外に出されるものであるとされる。気合は、すでに16世紀に来日したポルトガルの宣教師ルイス・フロイスの注目を引き、フロイスは次のように述べた。

Among us, no one utters a sound when shooting a bow; the Japanese have to let out a big cry when they release an arrow.²⁾

そしてさらに、

Among us, one fences without speaking; the Japanese must give a shout with every blow and parry.³⁾

他の様々なスポーツでも、選手は気合を入れるために大声を出し、観衆も応援団も大声によって気合を掛ける。大声は頑張りの証しとして理解されているようである。このように選手も観衆も応援団も一つになって努力する。叫び声のないスポーツは考え難い。他の国でも大声によるスポーツの応援はあるが、日本における応援は独特である。例えばヨーロッパのサッカーのフリーガンの叫びと異なって、比較的、秩序のある、コントロールされた、形の決まった掛け声である。

スポーツの場以外にも様々な場で大きな声に出会う。飲み屋や食堂に行けば、客は大きな声で迎えらる。注文も大きな声で復唱され、厨房まで伝えられる。客も大きな声で店員を呼ぶ。それに対して、例えばヨーロッパのレストランなどでは大勢の客が集まれば騒音レベルが高くなるにしても、個々の客は大きな声を上げないようにし、そしてウェーターは手や目の合図で呼ぶのが仕来りである。

日本では声質でキャラクターが作られる。電車の車内アナウンスであれ、売店の売り声であれ、本来の自分の声を変え、別の声を出す。独特の声質やイントネーションで、「業務用」のキャラクターになる⁴⁾。そしてテレビのバラエティ番組などでも不思議な声を持つキャラクターが登場する。声質は「役割語」の一つの要素であると言えよう⁵⁾。

ニュースやドキュメンタリーで外国人がインタビューを受け、声がシンクロナイズされる時も、その声は大げさで、無理やりにキャラクターが作られ、わざとらしいことが多い。そして動物を扱ったドキュメンタリーでは動物はまるで話せるように人間の、だいたい幼い作り声が付けられることが多い。

このような観察から、日常生活・スポーツ・芸能などといった日本文化の様々な場面で、声の使い方が独特であり、ユニークな創造性も働いていると推測できる。このような現象を理解するためにその背景について考察する。以上に述べたような現象について、声の使い方に注目する学問的文献は殆ど見当たらなかった。客観的に把握しにくく、全ては研究の対象にしがた

い現象である。ここでは、数少ない研究文献以外に、発声・話し方のトレーニングの書物や幾つかの日本の文学作品や礼儀作法の書物や個人の観察に基いて考察する。

3. 「声」とは何か

声には「人や動物が発音器官を使って出す音」,「物が振動しておきる音」,「発音のぐあい。語調」などの意味があるが、ここでは人が出す音という意味の声について論じることにする。人が出す音にも「社会的にきまった意味をもつことばと泣き声、笑い声、うめき声などことばにならないものがある」(『国語大辞典』)が、ここでは主に言葉になる声を扱う。その際、発音の仕方、語調、アクセントなどより、高い声や低い声などのような声質や大きい声と小さい声、そして様々な作り声に注目することにする。

「声」という漢字の本字は「聲」である。上の音符の「殸」(ケイ)は打楽器の名である。それは玉または石で「へ」の字形に作り、つるして打ち鳴らすものである。下に「耳」をつけて、「聲」は楽器の高い音が耳に達するという意味を表す(『新漢語林』)。鈴木英夫が述べるように、「語源的に考えても、〈声〉は耳によって〈聞く〉ことを前提としている」⁶⁾。つまり、声に耳を向ける人間がそこにいることが前提条件である。

それと比べて例えば英語の「voice」やフランス語の「voix」はラテン語の動詞「vocare」(呼ぶ、呼ばれる)や名詞「vox」(声、音、叫び、呼びかけ、スピーチ、ことば)と繋がりがあり、人が聞くという側面より、人が(強い)声を出すという側面のほうが重要であると考えられる。しかし、ドイツ語の「Stimme」はまた異なったニュアンスをもち、「Stimme」には「票」,「発言権」,「議決権」という意味もある。その語源はゲルマン語の「stimna」(口から出てくる音)である。同様にドイツ語の「Stimmung」(気分、機嫌、ムード)もその言葉に由来している⁷⁾。ちなみに英語の「stomach」(胃)はギリシア語の「stoma」(口)や「stomakhos」(のど、胃の噴門)にまで語源をたどることができ、ゲルマン語の「stimna」との繋がりも分かる⁸⁾。このようにヨーロッパの言語では人が声を出す際、その人の気分やムードが重要な役割を果たしており、声を聞くというより、声を出す人のほうが中心にある、と推定できる。

以上から、人の「声」の意味を持っている言葉は言語や文化圏によって異なったニュアンスや含意を包括しているといえよう。では、この含意と並行して、それぞれの文化圏によって、人間の声の使い方にも相違が現れているか?それは日本の文化ではどのように現れるか、を探ることにする。

声を出すことは(手話を使わなければ)人間の直接のコミュニケーションに不可欠である。そのために人間が発声器官を通じて発する言語音、つまり音声が必要である。金田一春彦は音声を「人間が有意的に音声器官を使って発するオト」⁹⁾と定義する。オトには、非音声と音声のものがある。非音声には足音・風の音などのような物理音や咳・くしゃみ・笑い声などのような反射音、有意的でない音がある。音声のオトには非言語音と言語音(言語音声・言葉音・音=オン)がある。非言語音には咳払い・舌打ち・作り笑いなどのような有意的表情音、そして鼻唄・模写音(物真似)・芸術音(歌)などのような遊戯音がある¹⁰⁾。ここでは主に言語音を焦点に据えることにするが、音声学には触れず、もっと広く日本の文化や社会全体を枠にして、

人間の声が話す時にどのように使われるかについて考察する。発音に注目するのではなく、「声(コエ)を出す」行為としての発声の中¹¹⁾、声の高さや低さ・声の音量や作り声を中心課題にする。

4. 声の描写・声の研究

人間の声をことばで描写するのは非常に困難である。声の高さ・低さなどを物理的に測って客観的に表すことはできるが、声の特徴をことばで表す場合は聞く方の主観的な印象に強く左右される。描写の難しさは松本清張の『声』という短編小説の中の的確に表現されている。電話交換手の朝子はたまたま強盗殺人の犯人の声を電話で聞いてしまい、警察の係官からその声について聞かれる。

甲高い声、低い声、中音の声、金属性の声、だみ声、澄んだ声、そういう声の種類に分けて、どれにあたるか、どの要素とどの要素が強いのかたずねられた。

そう質問されると朝子は困った。口ではうまく言えない。太い声だったと言っても、あまりに単純すぎる。太い声にも千種二千種の段階はあろう。ところで、質問者は、“太い声”という言葉聞けば、一つの概念を作りはしないか。それは困る。たとえば“かすれた太い声でした”と言えば、ややこちらの感覚を相手に通じさせることはできるが、“かすれた”というほどの特徴のない時は、どう表現したらよいか。感覚を言葉で正確に伝えるのが無理なのではないか¹²⁾。

声の描写は、どんなに多くの言葉が存在していても、その感覚を正確に伝えるのは困難であるに違いない。そして全ての描写にある程度の主観性が入り込むのは避けられない。おそらく、声の特徴やバリエーションについての研究があまり見当たらない理由はそこにある。1969年に、女性語を研究した言語学者の真下三郎は次のように述べている。

一体音声を修飾する言葉として、わが国では強弱・高低を始め、大きい・小さい、太い・細い、善い・悪い、美しい・汚ない、など種々の言葉をもっている。この中で前二つは、音声学にも用いられる学術用語であるが、他は俗称である。いうまでもなく高低と強弱とは、声帯の違った作用に名づけたもので、音響学的に言えば、振幅の大小が強弱、振動数の多少が高低であるが、その他の俗称は学問的に測定できない。それで大は強、小は弱に当たり、太は強くて低いこと、細は弱くて高いことと見てよい¹³⁾。

ここでは声について主観的に述べることを避け、客観性をなるべく保つために、主に高低や大小という学問的に測定できる声の質だけを論じることにする。

日本における声の多様性や氾濫はどのように考えられているか？アナウンスや騒々しい政治家の街頭演説など声による音、BGM、地下鉄・横断歩道などのメロディーを含む日本の都会に特有の騒音を、騒々しくて混沌とした、無秩序のものとして意識する人は少なくないと言えようが、現代日本の日常生活における音響的環境が広い意味で、文化とどのように関連している

かという問題は殆ど研究されていない¹⁴⁾。

日本人の声の研究といえは数は少ないが、声のピッチに関するものがある。その中に例えば1981年のリオ・ラヴデイのものがある。ラヴデイはイギリス英語と日本語における、思いやりや礼儀正しさの表現がどのように両言語の話者の、声のピッチに対する社会文化的期待や意見に左右されているかについて論じた。ラヴデイによると、イギリス英語話者の場合は、礼儀正しさを表すために男性も女性も声のピッチを上げるのに対して、日本語話者では男女の差が明らかになった。即ち、男性はお礼の言葉を使う場合にピッチを殆ど上げないが、女性は社会文化的期待にあわせて高いピッチで話すという¹⁵⁾。

また今井田亜弓の研究によると、声のピッチ、とりわけ声の高低が日本社会においてジェンダーを強調する重要な役割を果たしているという¹⁶⁾。

さらに声のピッチやジェンダーに関連してI. P. ユアサの2008年の著作を挙げるができる。ユアサは日本人とアメリカ人の声のピッチを社会音声学の立場から論じ、両文化では感情や慇懃さ(politeness)を表現することは声のピッチやイントネーションに影響を与えると指摘する。そして日本人の場合、声のピッチの変化を解明するには「あまえ」と「遠慮」という2つの心理的観念が重要な役割を演じるという。両者は互いに排除し合う観念であり、また「うち」と「そと」という二つの極と同一視することができる。

ユアサによると、日本人は親しい人と会話する時にはピッチの変化・バリエーションの幅がアメリカ人より広いという。それは、日本人が「うち」と「そと」という相反する人間関係を区別して人と接するからである。社会生活における態度を決めるこれら二つの概念は個人と社会にとって幾つかの意味をもっている。「そと」の極端は「遠慮」に対応する。これは距離のある、上下関係がかかわってくる間柄であり、人は自己規律を行い個人の感情を表に出さない。もう一つは「うち」であり、これは親密な人間関係で、「あまえ」に対応する。この状況では人は個人的な感情や考えていることを自由に表現できる。このように日本人は人間関係のあり方に応じて振る舞い方や話し方をあわせる。親しい間柄で対話する場合には、感情を伝えようとする意志を表すために声のピッチの幅を広めるのが決定的なシグナルとなる¹⁷⁾。

ユアサはY. Ohara (1999)が行った研究の結果を次のように述べている。Oharaは英語と日本語の両言語を話せる人の声を調査するために留守番電話の様々なメッセージを録画した。受信者は大学教授や友人である。男性の場合は母語や話す言語や受信者によって、ピッチのバリエーションは殆ど現れなかったが、女性の場合は日本語の母語話者だけではなく、英語の母語話者についても英語を話す場合より日本語を話す場合の方が平均的にピッチが高かった。そして受信者が友人より教授である場合のほうが、ピッチは平均的に高い¹⁸⁾。この研究から、母語に関係なく、女性が丁寧に日本語を話す場合に声のピッチが高くなるという結論が可能になる。女性と日本語と高い声という三つの要素はセットになっていると言えよう。そして日本語を習得する際に、女性は高い声で話すべきだという日本の価値観が言語と一緒に刷り込まれることも推察できる。

男性については、日本人は男性らしさをアピールするためになるべく低い声や荒い話し方を優先するのに対し、親しい間柄と話す場合には声のピッチのバリエーションが広がる。それと比べ、アメリカ人の男性はその場合でもピッチのバリエーションは変わらず、無感情のまま

である。その理由は男性に対するジェンダー・ロールの抑制であるとユアサは主張する。父権制社会では男性は女性と異なって、常に感情を抑圧すべく理性的に振る舞うべきとされているので、声のピッチのバリエーションによって感情を表に出すのは抑えられると推測される¹⁹⁾。(イギリス英語では男性が礼儀正しさを表すためにピッチを上げるのに対して、アメリカ英語話者の男性はそうではないということは注目すべきである。)

Rebecca L. Starrによると、日本の大衆文化の中には様々な女性らしさの観念があり、女性らしさを表現するのに、ピッチの高い声だけではなく、高さに関係のない、「sweet voice」²⁰⁾という声質もある。Sweet voiceは一般の女性ではなく、プロフェッショナルな声優が使う、女性らしさの伝統的な、成長した大人のイメージを表す声質であると主張している。歌声のような響きがあり、sweet voiceで話す人はほほ笑むように聞こえるという²¹⁾。

5. 発声トレーニングの書物

声をオーディエンスによって意識したりボイストレーニングを受けたりするのは世界共通の認識であろうが、日本における「声」の使い方というテーマに近づくには、日本で出版された発声や話し方のトレーニングの書物が役立つ。例えば、演出家の鴻上尚史のものがある。彼は、メイクやファッションには気を配る人が多いのに、声や体に気を使う人は少ないことを不思議に思っていて、テレビで放送される日本の政治家の国会答弁について次のように失望している。

下を向いたまま、官僚の書いた作文をボソボソと読んでいるなんていう風景によく出会います。「こえ」は単調で、力がなく、ひよろひよろと飛んではすぐに落ちていくというイメージです。(・・・)その「こえ」だけで、聞く気がなくなってしまう²²⁾。

鴻上によると声の5つの要素は「大きさ」「高さ」「速さ」「間」そして「音色(音質)」であり、これらを意識すると、声が豊かになるという。その5つの要素が豊かになると、話しは面白く、魅力的になる。具体的な例として「落語」を挙げ、「話す内容が同じなのに、面白いものつつまらないものにはっきりと分かれる」と述べる。多くの人は一色の「音声」しか使わないが、いろんな色の声を出してみるのには良い練習になると強調している。例えば「アニメ声」、「バスガイドのような声」、「応援団のような声」、「ドラえもんのような声」である²³⁾。

言語聴覚士である村上由美は、日本では声に対するイメージがあるのに、歌声以外では声の出し方はあまり話題にされないと言及する。村上によると、「(いい声)になるためのアプローチは、声の仕組みを知ることなのですが、それによってうまく体を動かせるようになると、〈ものまね〉がうまくなります」²⁴⁾。一方、鴻上は、ものまねがうまくななくても、様々なタイプの声を出してみれば、「ある感情やイメージ」がわいてくると強調する。

このように鴻上も村上も自分の思っているいい声に近づける手段として、「ものまね」の役割を取り上げ、声は生まれつきのものではないので、変えること、良くすることができる言及している。

音色の重要性を明らかにするために、二人とも田中角栄の声を取り上げる。鴻上によると、

田中角栄の特徴的なだみ声は「庶民的」であり「エネルギッシュ」という印象を与えたが、もし彼にテレビのアナウンサーのような声があったら総理大臣にならなかったであろうという²⁵⁾。村上は田中角栄の声を「暴走族のような無駄に大きい声」の例として挙げ、その荒削りの話し方は高度成長期には魅力的だったかもしれないが、今日ではこのような話し方をする政治家は歓迎されないだろうと言う²⁶⁾。

村上は様々な人に、「いい声」「悪い声」と思うのはどんな声かと尋ねて、「いい声」とは洪い声、よく通る声、張りのある声、適切な大きさの声、元気な声、明るい声、説得力のある声などで、「悪い声」はダミ声、かすれ声、しわがれた声、か細い声、甲高い声、大きすぎる声、小さすぎる声などの回答を得た。人によっていい声・悪い声のイメージは異なり、異性からは「いい声」と思われている声も、同性にとっての「いい声」とは限らない。例として、一時期に流行った「ぶりっ子」の声は男性に人気があったが、女性はそれほど好まなかったことを挙げる。そして、村上は、場合や場所、雰囲気に応じて声を使い分けられることを理想として揚げる²⁷⁾。なお、日本では声の出し方や話し方は「年齢や性別といった社会的なフィルターをかける傾向が強いようです」と述べ、例えば日本では(台湾・韓国などの東アジアの国々と同じく)女性の高い声がかawaiiと思われているが、反対に欧米では女性の高い声には子供っぽいイメージがあるため、落ち着いた低い声で話すほうが好まれていると強調する²⁸⁾。

村上は様々な声の悩みを解決するためのトレーニングを提案する。例えば裏声でしか話せない場合、またはウグイス嬢やバスガイドのように口先でしか話せなくて、マイクなしでは声が届かない場合(マイク依存症)²⁹⁾や上から目線に聞こえる声などの場合、それらを治すための訓練法を示す³⁰⁾。

村上や鴻上の著作を読めば、日本における「声」の出し方や話し方の問題、理想や文化的・社会的背景について、いろんな事実が浮き彫りになる。一つ注目すべきところであるが、日本では声に関するトラブルや不満の原因は、社会の期待やイメージによって、あるいは仕事によって声の使い方や話し方に望ましくないクセがつくことである。実際、仕事や流行りや社会的期待にふさわしく声を変えるのが望ましく、当たり前のこととされている。つまり、声は生まれつきのものではなく、人それぞれが作ったり作り直したりするものとされているのである。

6. 声と恥

日本人は若い頃から大勢の人の前でも大きな声で自己紹介などをする習慣がある。恥ずかしがり屋の人であっても、聴衆の前で話す機会がしばしばあり、避けては通れない³¹⁾。

レストランのウェーターや店員は大きな声で客に呼び掛ける。歌舞伎などでは観客の掛け声いくつものが響き渡る。政治家やデモの参加者は声を限りにスピーチをする。世界中どこでも人は大声でスポーツの試合で声援をかけたり、デモでスローガンを叫んだりするが、それはおおむね個人個人の単独の行動ではなくグループの行動である。しかもそれは多くは感情にかられた無秩序な喚声である。一方、日本ではスポーツをする際に気合を入れたり、応援したり、店で物を売ったり、ウェーターを呼んだりするなどという目的があれば、個人が大きな声を出すことは一般的に社会に認められていることであるので、躊躇なく大きな声を出すと考えられる。

日本人の精神構造の分析や説明のために、土居健郎が述べた「遠慮」やルース・ベネディクトの「恥」などのような観念が度々利用される。日本人には「遠慮」も「恥」も強く働いているとされている。しかし、大勢の人の前で単独で大きな声を出すには遠慮や恥ずかしさという気持ち乗り越えなければならないことを考えれば、日本人の行動はこれら二つの観念では説明できない。逆に、恥と遠慮がそれほど重大な役割を演じないとされている中央ヨーロッパで個人が大きな声を出さないのは、おそらく恥ずかしく、遠慮したい気持ちが働くので、なるべくしたくないからである。例えばレストランでは、大きな声でウエーターを呼ぶのはタブーである。

このように、大きな声を出すことに関しては、「恥」とか「遠慮」といった心理的観念を当てはめて説明するのは困難であり、これらの観念の適用範囲には限界がある。もっと広く言えば、全体的に行動パターンを観念で把握するには限界があるにちがいない。そもそもどの文化でも恥や遠慮という気持ちがある程度存在していても、どんな場合に恥を感じるか、どんな機会に遠慮するか、などということは文化によっていくらか異なる。日本では時と場合によって大声を張り上げる習慣があるので、人々はその時とその場合に躊躇なく大声を出す。その場ではそもそも恥をかく心配もなく、遠慮する必要性を感じないからである。そして例えばヨーロッパ文化圏の、大声を出すのは恥ずかしいと感じる人々が、本来恥を強く意識していると思われる日本人の叫び声や掛け声などを聞いて、驚きや違和感を覚えるのは何ら不思議ではない。

以上のことから、叫び声や掛け声などという現象を理解するには精神構造に関する観念に依拠するのではなく、広く社会的・文化的習慣を探るほうが有効であると考えられる。

7. 理想的な声

日本では、どのような声が理想的とされたか、という問の答えに近づくために、日本の歴史を遡り、文学作品や教訓書における人間の声に関する記述の幾つかの例を挙げる。『源氏物語』では源氏の仲間が求愛的となる女性たちについて、「わずかなる声聞けばかり言ひよれど、息の下にひき入れ言少なるが」と述べる³²⁾。ここは貴族の女性についてだけであるが、淑女は男性に言い寄られ、会話をするようになれば、あまり大きな声で話さない、しかも殆ど聞きとれないほどの微声で物を言うこと、そしてあまりたくさん話さないということが理想的であったと読み取れる³³⁾。

さらに、清少納言の『枕草子』にも同様の意見が見られる。「短くてありぬべきもの」(「みじかくても良いもの」)として、「人の女の声」が挙げられ、結婚前の女性は声を聞かさないほうがいい、そしてあまり話さないほうがいいとされている³⁴⁾。

なお、平安時代は貴族の女性が人の前で歌を歌うのはタブーであった。女性が声を出すことも歌うことも下品な行為とみなされたが、芸能史の専門家である沖本幸子は、「女性が声を出すこと歌うことが開けっぴろげでみともない行為にも成り得た一方で、声が極めてエロティックな力を持ちえた」と述べている³⁵⁾。歌を歌う役目を担っていたのは遊女であり、その美しい歌声は空に「すみのぼる」と表現され、神仏と交流できる術であると思われた。声がすばらしければ、神が感応すると信じられた³⁶⁾。「すみのぼる」という表現は『更級日記』などいくつか

の物語でしばしば使われたが³⁷⁾、美しい歌声を指し、高く澄んだ声を意味したと思われる。

室町時代の著作と推定され、公家の子どもを戒める教訓を述べた『めのとのさうし』の中には、「御むすめそだて候こと、十ばかりにもなり候はば、おくふかく人にみせられ候まじ、心もちうらやかに、こゑひきく、御そだて候へ」³⁸⁾と書かれている。このように、十歳ぐらいから女性は低い声で、つまり小さな声で話すように育てるべきであるとされている³⁹⁾。ここで「低い」声というのは現代のいわゆるピッチの低い声ではなく「小さい」声を意味することは注意すべきである。

では、近世にはどのような声が理想とされたのだろうか。声そのものについてはないが、江戸時代の女子教訓書である貝原益軒の『女大学』では、妻を離縁できる七つの事由（「七去」）の内の六つ目の事由として、「多言にて慎なく、物いひ過すは親類とも中悪しくなり、家みだるものなれば去るべし」⁴⁰⁾とあり、他所では女は「情深く静なるを淑とす」⁴¹⁾と書かれている。女性は静かで、あまり話さないのがいいとされ、平安時代と同様な女性の理想像が見られる。

これまで、女性の理想的な声や話し方についてしか述べなかった。女性の教訓書や女性をこまかく描写する文学作品などはいくつもあるが、男性の声や話し方などを対象とするものが少ないので、男性の理想的な声または望ましくない声について調べるのはなかなか困難である。それでも『枕草子』では男性の声が数か所で取り上げられている。

その中で清少納言は僧侶の声を描写しており、そこから当時どのような声の不評だったかが想像できる。例えば「すさまじきもの」の段には、

験者の、物怪調ずとて、いみじうしたり顔に独鈷や数珠など持たせ、せみの声しほり出だして誦みゐたれど、いささかさりげもなく、護法もつかねば、集り居、念じたるに、男も女もあやしと思ふに、時のかはるまで誦み極じて、「さらにつかず。立ちね」とて、数珠取り返して、「あな、いと験なしや」と、うち言ひて、額より上さまにさくり上げ、欠伸おのれうちして、寄り臥しぬる。いみじうねぶたしと思ふに、いとしもおほえぬ人の、押し起して、せめてもの言ふこそ、いみじうすさまじけれ⁴²⁾

とある。「せみ」のような甲高い「声をしほりだす」ように呪文を唱えても、物怪を調伏することができない験者は著者の目に実につまらない人のように映る。

また、清少納言が寺に泊まった時のこととして、夜中にも騒がしく、

すこしうち休みたる寝耳に、その寺の仏の御経を、いと荒々しう尊くうちいでよみたるにぞ、いとわざと尊くしもあらず、修行者だちたる法師の蓑うち着たるなどがよむななりと、ふとうちおどろかれて、あはれに聞ゆ⁴³⁾

とある。夜中にふと目が覚めて耳にした僧侶の荒々しい声に、蓑を着ているような貧しい姿の僧が詠んでいるのだろうと想像され、お経が悲しげに聞こえたというのである。このことから清少納言の時代には男性のせみのような、しほり出すような声や荒々しい声はあまり好ましく思われなかったと考えられる。

逆に男性の声がどれほど魅力的か、どれだけ人々に影響をあたえられるか、について、法然の弟子であった安楽と住蓮（ともに1207年没）という二人の僧のエピソードがある。彼らは法然の念仏信仰宣言に従って「六時礼賛」に努め、念仏を盛んに行った。『智恩伝』によると、仏が住蓮の声を鳥の囀りのように響かせたので、「六時礼賛」の響きは魅力的であったという。そのため多くの信者が集まり、後鳥羽院の御所の女房が二人も出家した。それが上皇の怒りを買って、二人の僧は処刑され、法然は四国まで流されるという事件になったという⁴⁴⁾。

江戸時代中期の『葉隠』は武士道の根本を示した書物として知られている。その中で武士はどのように話すべきかについては述べられているが、声についての記述は見当たらない。人どのように話すべきかについては、

とくに理屈っぽく強気の人には、こちらの方から折れて出て、角が立たないように扱い、たまたま相手になる以上は、自分の理屈で説き伏せ、しかもその後少しも遺恨を残さぬようにするのがよい

とされた⁴⁵⁾。また、

ものを言う場合肝腎なことは、言わないことである。言わずにすまそうと思えば、一言も言わなくてもすむものだ。どうしても言わねばならぬことは、言葉少なくしかも道理が通るように言うべきである。不注意に口をきいて恥をかき、人から見限られることがよくあるものだ⁴⁶⁾

と書かれている。このように、武士はなるべく落ち着いた話し方をし、なるべく少ない言葉で話すのが理想であった。

8. 大声・小声

現在では「高い声」と聞けば通常ピッチの高い声で、そして反対に「低い声」といえばピッチの低い声で思い浮かぶが、『めのとのさうし』に見られるように、「低い声」の本来の意味は小さい声であり、逆の「高い声」は大きい声を指していた⁴⁷⁾。網野善彦によると、日本の古代や中世では、「高声」という言葉は大声という意味で使われ、そして小さい声は「微音」と言われ、その「高声」と「微音」は宮廷の諸行事や寺院での法会における所作では、厳密に使い分けられていた⁴⁸⁾。

「微音」つまりささやき声といえば、民俗学では神の声、つまり聖なるものの声で、人ならぬものの声は常に「ささやき声」であるとされていた。よって、網野は、天皇、院、摂関、將軍はおそらく「聖なる存在」として「微音」で意思を伝えた、と推量している⁴⁹⁾。

それとは対照的に日常的な場面で「高声」を出すことは乱暴とされ、忌避され、「高声」は神前や仏前では厳しく禁じられていた⁵⁰⁾。しかし、時と場合によっては、「高声」が必要とされたり要求されたりもした。例えば百姓や氏子・衆徒たちがお上に訴える（越訴する）時には、紙

に書いて訴えるのではなく、「高声」で訴えるという慣習があった⁵¹⁾。

以上、見てきたように、平安時代から公家など育ちの良い女性は普段「大声」を出さない、「小声」で落ち着いた話し方をするのが理想であったが、それは女性だけではなく、位の高い男性に対する理想も同様であったと考えられる。例えば江戸時代の武士の場合、激しい口調ではなく、冷静で落ち着いた話し方が理想的であったから、声に関しても激しい声より「小声」のほうが望ましいとされていたと思われる。

総じて「小声」の方が上品で良いとされ、育ちのいい人や位の高い人、公家や武士などは「大声」で叫ぶより「小声」で話す方が相応しく、上品とされたと考えられる。それは一般庶民との間に線を引いて、自分の高い位を強調するためでもあったにちがいない。それとは対照的に、農民などの庶民にはこのような縛りがなかったので自由に「大声」でも話したと思われる。

9. 女性の声・男性の声

日本語では女性特有の言い回しや単語を指す「女性語」という言語学上の概念がある。真下三郎によると、女性の言葉と男性の言葉の違った点は平安時代から見られるようになったようであるが、はっきりとした区別が認められ、区別が現れたのは14世紀(室町時代)であった⁵²⁾。現代では男女性の話し方の差がだいぶ曖昧になってきたと言えようが⁵³⁾、男女の違いがまだはっきり残っているところがあるの言うまでもない。

60年代に国語学者の榊島忠夫が行ったアンケートによると、女性語と男性語の間の最も重要と思われる差は、価値的差・語彙的差そして生理的差である⁵⁴⁾。価値的差とは、男性より女性において丁寧語・尊敬語のルールが守られていることである。次に、語彙的差は、女性には使うべき単語や使うべきでない単語があることを指している。そして最後の生理的差が本稿でテーマにしている「声」にかかわる。

Hijiyaによると、「声」というのは、殆ど変化しない身体的条件として、一般的には女性語や男性語に関する研究ではあまり興味を引かない分野とされているのに対して、日本では「声」は重要な要素として強く意識されている。さらに、欧米から来日する外国人は日本人女性の、とりわけエレベーターガールや売り子など公衆の場で働いている女性のピッチの高い声を直感的に女性らしさの現れとして認識している。女性の作為的に高く出される声は社会的規範への適応の結果として、女性としての美的ステータスを持ち、女らしさを表現するのに不可欠な道具であるという⁵⁵⁾。

外国人が日本人女性は作為的に高い声を出すと認識しているのに対して、日本では女性の高い声は男女の差による、生まれつきの特徴であると思われる。例えば真下は1969年に『婦人語の研究』の中で声について「男子は低い、婦人は高いのが普通で、むしろ高いという事が婦人の音声の最大の声質である」と述べている⁵⁶⁾。さらに、「婦人はさほど無理をしなくても高い声が出る」と強調した⁵⁷⁾。真下は明らかに女性の高い声が自然で、作為的に高くするというより、女性の声は努力しなくても高く出ると考えている。真下がいかに女性の高い声を好ましく思っているかは次の文にはっきりと読み取れる。「殊に若い婦人の声は、声帯の関係で全く恵まれているといってよい。張りがあり、きれいで、やわらかで、澄んでいてしかもふっくら

としている」と真下は賞賛している⁵⁸⁾。

女性の魅力的な声についての記述が文学作品にもある。その一例が川端康成の『雪国』の中にみられる。ある女性は汽車の窓から、駅長に声をかけ、語り手はその声を「悲しいほど美しい声であった。高い響きのまま夜の雪から木魂して来そうだった」⁵⁹⁾、と表現する。その女性の声は、聞く人にとって哀愁の気持ちが湧くほどに美しかった。そして、その声は高い声であったと分かる。

真下の文章は約50年前に書かれたものであるが、近年でもなお「女性は高い声のほうがかわいい」というイメージが強い⁶⁰⁾。ユアサは、日本人の女性のニュースキャスターやデパートの従業員の声のピッチをテーマにした1995年のNew York Timesの記事と1996年のDaily Yomiuriの記事を取り上げている⁶¹⁾。前者によると、日本のデパートで働いているエレベーターガールは高い声で話せるように訓練されている。日本では特別に大事と思われている礼儀正しさと親切さに、女性の高い声は結びついていて不可欠である、とされている。そして女性のニュースキャスターの場合も、高い声の方が望ましいと思われている。後者の記事によると、最近の女性のテレビのアナウンサーの声は以前と比べて低くなってきた。しかし、低い声を出すのは難しいというニュースキャスターの苦悩についても書かれている。そして、女性アナウンサーが声をわざと低くしようとすれば、声の響きが不愉快に聞こえるという意見も紹介されている。女性アナウンサーの声が低くなってきている理由は、低い声の方が説得力があり、知的な雰囲気を出せるからであると言われている。日本では公共の場で働いていて発声する女性の声のピッチはある程度意識され、論じられてもいることは両方の記事が証明している。

様々な人の意見を聞いても、ネットにおける種々の個人のブログを読んでも、女性の声についての多様な意見がみられる。高めの声の方が明るく、好感が持ててチャーミングであると思う人もいれば、高い声のわざとらしいぶりっ子ぶりは耐えられないという人もいる。また、低い声についても賛成派と反対派の両方がいる。

以上のことから、日本人の女性は自分の生まれつきの声で話すより、外的な要求に合わせて声を変えようとする傾向があることが浮き彫りになる。可愛らしさ・明るさ・丁寧さなどを表現しようとするればわざと高い声を出し、逆に説得力・知恵・重みなどを表現したい場合は声を低くしようとするのである。そして特に公衆の場で声を使って働いている女性は音域のモードを変えるのに苦労することが多いにも拘らず、進んで周りの指示や期待、流行などに従おうとしている。

上に述べたように、日本の古代から近世までに現れた様々な文章によると、上品な位の高い女性に限らず、男性も一般的に大きな声を出さない方がよい、小さく落ち着いた声で話したほうがよいと思われたと考えられるが、声のピッチの高さや低さについては、古代から近世に至るまで記述が見当たらない。女性は女性らしさを表現するためになるべく高い声で話すべきであり、それに対して男性は低い声のほうが男性らしい、というステレオタイプはいつからできたのだろうか。近代・現代に入ってからのも、比較的新しい現象である可能性があるが、このような推測を証明するにはさらに深く探る必要がある。

様々な日本人学者の書いた、日本人の声に関する記述を集めたユアサによると、女性の声であれ男性の声であれ、ピッチの高い声を異常として貶す発言はなかった⁶²⁾。しかし文学作品を

見れば、女性的な男性の声を非難する文章を挙げることができる。そのひとつの例が夏目漱石の『坊っちゃん』である。坊っちゃんは「赤シャツ」と名付けた新しい同僚を次のように描写する。「妙に女のような優しい声を出す人だった」⁶³⁾、そしてさらに

赤シャツは気味の悪るいように優しい声を出す男である。まるで男だか女だか分りゃしない。男なら男らしい声を出すもんだ。ことに大学卒業生じゃないか。物理学校でさえおれぐらいな声が出るのに、文学士がこれじゃみっともない⁶⁴⁾

とあり、赤シャツの声は坊っちゃんによって繰り返し嫌悪の対象として描かれる。また、「赤シャツは声が気に食わない。あれは持ち前の声をわざと気取ってあんな優しいように見せてるんだろう」⁶⁵⁾と、その声は赤シャツの本来の声ではなく、作為的に変えた作り声であると坊っちゃんは軽蔑的にみている。ここでは、赤シャツの声のピッチが高いなどということは書かれていないが、坊っちゃんはその声を「女のような」声として描いているので、「優しい」響きだけではなくピッチの高さも指していると思われる。男ははっきりと「男らしい声」を出すべきである、というステレオタイプがでていると言えよう。

10. 真似する声・作り声

坊っちゃんは、赤シャツが声を変え、作り声で女性のように話していると推測する。彼はそのことを好意的にみていない。しかし、日常生活ではあまり好まれていないとしても、これは舞台では正当な芸である。男性が女性のような声を出すことは、日本の演劇でみられる現象である。逆に女性が男性のような声を出すこともある。男女の役割を裏返し、女性が男性を演じ、男性が女性を演じることは日本の演劇文化の中で長い伝統がある。歌舞伎では17世紀から女性が舞台にあがるのが禁止されるようになり、男性は否応なしに女性の声や振る舞いなどを真似して「女形」として女性を演じるようになった。「女形」は純粹の女らしさを表現するだけではなく、理想的な女性像を体現するので、「第三の性」とも呼ばれた⁶⁶⁾。17世紀には、舞台にあがる時だけではなく、普段から女性として生活し、場合によっては銭湯で女風呂に入ることも許された女形もいた⁶⁷⁾。

宝塚劇場の歴史はそれほど古くないが、1913年の設立以来、女性が「男役」として理想的な男性を体現している。男性の声を真似て、手振り・身振りや外見や雰囲気などで、実際の男より男らしいと言えるぐらいの、完璧な男になりきる。このような性の逆転は観衆に許容された異常な現象ではなく、それぞれの劇の大切な「花」である。歌舞伎の「女形」や宝塚劇場の「男役」は特別に注目を浴び、人気が非常に高い。「女形」も「男役」もそれぞれ異性の声を真似しなければならないことは言うまでもない。「女形」は出来るだけ女性のような高い声を出そうとし、歌舞伎の雰囲気に合わせた、ユニークな声になる。そして「男役」は男性の低めの声を真似する。坊っちゃんは赤シャツの女性のような声を滑稽と感じたようであるが、歌舞伎や宝塚の観衆は異性の声を真似することに対して違和感を覚えず、当たり前のこととして受け入れる。日常生活では好ましくないことも、舞台では許されているとも言えよう。

異性を真似る芸はそれに止まらない。見海堂駿の劇団で見られるように、大衆演劇では、男性の俳優が宝塚の男役を演じる、つまり男性が男性を演じる女性をまねることもある。そして逆に、女性が女性を演じる男性（女形）をまねることもある⁶⁸⁾。

異性の声だけではなく、他人の声の真似をするのも芸能の世界では重要な表現手段である。このような特徴を備えた文化的背景を考えれば、一般の生活でも一人がひとつの声だけではなく、場面や人間関係のあり方などに応じて声を変え、異なった声を使い分ける習慣の存在が理解しやすくなる。

11. まとめ

生活環境における声の氾濫、様々な場面における声の重要な役割を考えると、日本人が「地声」だけではなく、複数の種類の声を使い分けて話すのは不思議ではない。日本人は日常の生活では普通の声で話すとしても、時と場合によっては別の声を使う。声を独創的に使って感情・思いやり・慇懃さ・熱心さ・精勤などを表現する。女性が女性らしさを表現するために特に高い声を使うことは社会の期待に合わせたもので、それは声の使い方のまた別の側面を示す。声は生まれつきのものであるが、現状の声に不満を持ったり様々な条件に合わせてたりして、自分の声を変えることには日本人はあまり違和感を覚えない。

古代に遡って、大声と小声、高い声と低い声の使い分けに関して、日常生活、宗教、政治などそれぞれ異なった規律や暗黙の了解があった。位の高い女性は小さな声で、「低い声」で話すことが理想であったものが、いつからピッチの高い声が女性の理想的な声として定着したかについてはまだ十分明らかにできなかった。古代から女性らしくてピッチの高い声がかいれだと思われたと考えられるが、現代のアニメの普及やアニメに登場する裏声で話すキャラクターの流行に影響されてピッチがさらに高い方へと向い、不自然な、極端に高い声を出す女性が増えた、という推定は可能であろう。そして現代に一般的に現れる女性に関する若さ・純粋さ・かわいらしさが理想化されるにつれて高い作り声が増えていることがさらに理解しやすくなる。

ユアサによると日本人は、親しい人と話す場合、つまり「うち」の場合、感情を伝えたい意志を表すために、声のピッチの幅を広める。それは自然の声の使い方であるか作り声であるか、決めつけがたい。一方、「そと」という公の場では本当の感情を表すと恥をかくので、それを避けるために作り声で話す。それは例えば電車内アナウンスの業務用キャラクターの不思議な響きの裏声の説明にもなる。それは自分の本当の声ではないので本当の自分を隠すことができる。そして躊躇なくアニメのような裏声や、大きな声を出すことも可能となる。

注

- 1) Yuasa, Ikuko Patricia 26-27, Loveday, Leo 86, Hijiya-Kirschnerreit, Irmela 35, 今井田亜弓 15.
- 2) Reff, Daniel T. 154.
- 3) Reff, Daniel T. 162.
- 4) 定延利之 127.
- 5) 金水敏 205. 金水は役割語を次のように定義している。「ある特定の言葉遣い（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞くと特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等）

を思い浮かべることができるとき、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉遣いを思い浮かべることができるとき、その言葉遣いを「役割語」と呼ぶ。」

- 6) 鈴木英夫 44～45.
- 7) 鈴木英夫 51. 鈴木によると、この語源的関連は、声の一時性、一過性や、声は刻一刻と変わる気分を表出することを暗示している。
- 8) *Etymologisches Wörterbuch des Deutschen*. München: Deutscher Taschenbuch Verlag 1995. *The Oxford Dictionary of English Etymology*. Oxford: At The Clarendon Press 1966.
- 9) 金田一春彦『日本語音韻の研究』東京堂出版 1967 (中村万里「日本語の音声」26 参照)。
- 10) 中村万里 26.
- 11) 中村万里 27～28.
- 12) 松本清張「声」135.
- 13) 真下三郎 28～29.
- 14) Plourde, Lorraine 71.
- 15) Loveday, Leo 86.
- 16) 今井田亜弓 20～21.
- 17) Yuasa, Ikuko Patricia 113.
- 18) 同上 65. (Ohara, Y.: "Performing gender through voice pitch: a cross-cultural analysis of Japanese American English". In: U. Pasero and F. Braun (eds) *Wahrnehmung und Herstellung von Geschlecht: Perceiving and Performing Gender* 105-16. Opladen (Wiesbaden): Westdeutscher Verlag 1999 を参照)。
- 19) Yuasa, Ikuko Patricia 139～140.
- 20) 役として、「甘い声」、「優しい声」が最も近いであろう。
- 21) Starr, Rebecca L. 6.
- 22) 鴻上尚史 14.
- 23) 鴻上尚史 184～185.
- 24) 村上由美 22.
- 25) 鴻上尚史 183～184.
- 26) 村上由美 39.
- 27) 村上由美 19.
- 28) 村上由美 111.
- 29) 村上由美 87, 130.
- 30) 村上由美 121.
- 31) 深澤のぞみ(他) 36 を参照。それはひとつの例にすぎないが、そこには、JET プログラムの経験者のインタビューが次のように掲載された。「自己紹介のあいさつスピーチの頻度は大変高かった。」
- 32) 『源氏物語』 <http://james.3zoku.com/genji/genji02.html> (2 帚木, 2.3 左馬頭, 藤式部丞ら女性談義に加わる)。
- 33) Yuasa, Ikuko Patricia 17, 真下三郎 39 を参照。
- 34) 『枕草子』(下巻) 220 段 (96, 現代訳 341) 「短くてありぬべきもの とみのもの縫ふ糸。下衆女の髪。人の女の声。燈台。」。
- 35) 沖本幸子「芸能の声—遊女をめぐる」141.
- 36) 沖本幸子 160～161.
- 37) 沖本幸子 146～154.
- 38) 『めのとのさうし』12 (左側)。
- 39) 岡ヤス子 13, 真下三郎 40 を参照。
- 40) 『女大学』687.

- 41) 『女大学』 686.
- 42) 『枕草子』(上巻) 22段 (39～40, 現代訳 244～245)。
- 43) 『枕草子』(上巻) 116段 (158, 現代訳 380)。
- 44) 阿倍 114～115.
- 45) 『葉隠』 I, 132.
- 46) 『葉隠』 II, 344. Yuasa, Ikuko Patricia 25～26 を参照。
- 47) Yuasa, Ikuko Patricia 17 を参照。
- 48) 網野善彦 12.
- 49) 網野善彦 19.
- 50) 網野善彦 20～21.
- 51) 網野善彦 24～26.
- 52) 真下三郎 8.
- 53) Endo, Orié 40. 文学の中の, 人称詞・文末詞や感動詞の使い方に関する, 女ことばや男ことばにおける差やその差の縮まりについて, 黒須理紗子 (2008) のものがある。
- 54) Hijiya-Kirschnerreit, Irmela 35 を参照。榑島忠夫「言葉の男女差についての意識」『国語国文』35 (5), 124-132, 1966.5..
- 55) Hijiya-Kirschnerreit, Irmela 35～36.
- 56) 真下三郎 29～30.
- 57) 真下三郎 30.
- 58) 真下三郎 37.
- 59) 『雪国』 6.
- 60) 村上由美 111.
- 61) ユアサ 26～27 (Kristof, N. D., “Japan’s feminine falsetto falls right out of favor”. *New York Times*, 1995.12.13. Muranaka, C., “Women newscasters lowering pitch”. *The Daily Yomiuri*, 1996.6.13.).
- 62) ユアサ 32.
- 63) 『坊っちゃん』 27.
- 64) 『坊っちゃん』 55～56.
- 65) 『坊っちゃん』 69.
- 66) 落合清彦 19.
- 67) Robertson, Jennifer 153～155.
- 68) Ivy, Marilyn 217～218.

参考文献

- 『女大学』 貝原益軒, 日本教育思想体系, 誠進社 1979, 上巻 686～691.
- 『源氏物語』 <http://james.3zoku.com/genji/genji02.html> (アクセス 2017. 5. 4.).
- 『葉隠』 I・II, 奈良本辰也, 駒敏郎 訳, 中央公論新社 2006.
- 『枕草子』, 石田穰二 訳注, 角川文庫 1999.
- 『めのとのさうし』 早稲田大学図書館
http://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/ro09/ro09_01088/ro09_01088.pdf (アクセス 2017. 5. 3.).
- 阿部泰郎 (2007). 「儀礼の声—念仏の声をめぐりて」, 兵藤裕己 (編) 『シリーズ思想の身体—声の巻』, 春秋社, 99～133.
- 網野善彦, 笠松宏至, 勝俣鎮夫, 佐藤進一 (編) (1988). 『ことばの文化史・中世 1』, 平凡社.
- Endo, Orié (1995) “Aspects of Sexism in Language”, in Kumiko Fujimura-Fanselow, Atsuko Kameda (eds.)

- Japanese Women*. New York: The Feminist Press.
- 深澤のぞみ, ヒルマン・小林恭子 (2012). 「日本語パブリックスピーキング能力養成のニーズを探るための基礎調査」, 『金沢大学留学生センター紀要』15, 金沢大学留学生センター, 25～43.
- Hijiya-Kirschner, Irmela (1988) *Das Ende der Exotik*. Frankfurt am Main: Suhrkamp.
- 兵藤裕己 (編) (2007). 『シリーズ思想の身体—声の巻』, 春秋社.
- 今井田亜弓 (2006). 「若い日本人女性のピッチ変化に見える文化的規範の影響」, 『言語文化論集』第27巻第2号, 名古屋大学, 13～26.
- Ivy, Marilyn (1995) *Discourses of the Vanishing*. Chicago and London: The University of Chicago Press.
- 川端康成. 『雪国』, ほるぷ出版 1983.
- 金水敏 (2003). 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店.
- 鴻上尚史 (2012). 『発声と身体のレッスン』, 筑摩書房.
- 黒須理紗子 (2008). 「女ことば・男ことばの研究—差異と変遷—」, 『日本文学』104, 187～203.
- Loveday, Leo (1981) "Pitch, politeness and sexual role". *Language and Speech* Vol 24, Part 1, 71-89.
- 真下三郎 (1969). 『婦人語の研究』, 東京堂出版.
- 松本清張. 「声」, 『松本清張傑作選—黒い手帳からのサイン』, 新潮社 2013, 123～209.
- 村山上由美 (2009). 『声と話し方のトレーニング』, 平凡社.
- 中村萬里, 永淵道彦 (編) (2001). 『音声言語とコミュニケーション』, 双文社出版.
- 中村萬里 (2001). 「日本語の音声」, 中村萬里, 永淵道彦 (編) 『音声言語とコミュニケーション』, 双文社出版, 25～57.
- 夏目漱石. 『坊っちゃん』集英社文庫 2015.
- 落合清彦 (1983). 『歌舞伎の芸』, 日本の芸シリーズ, 東京書籍.
- 岡ヤス子 (1976). 「女子教育に関する一つの考察 (第四報) —鎌倉・室町時代の公家の女子教育—」, 『広島文化女子短期大学紀要』9, 11～22.
- 沖本幸子 (2007). 「芸能の声—遊女をめぐる—」, 兵藤裕己 (編) 『シリーズ思想の身体—声の巻』, 春秋社, 135～162.
- Plourde, Lorraine (2014) "Distraction, noise, and ambient sounds in Tokyo", in Joseph D. Hankins, Carolyn S. Stevens (eds) *Sound, Space and Sociality in Modern Japan*. London and New York: Routledge, 71-88.
- Reff, Daniel T., Richard K. Danford, Robin D. Gill (2014) *The First European Description of Japan, 1585*. London and New York: Routledge.
- Robertson, Jennifer (1998) *Takarazuka. Sexual Politics and Popular Culture in Modern Japan*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- 定延利之 (2005). 『ささやく恋人, りきむレポーター—口の中の文化』, 岩波書店.
- Starr, Rebecca L. (2015) "Sweet voice: The role of voice quality in a Japanese feminine style". *Language in Society* 44 (1), 1-34.
- 鈴木英夫 (2007). 「自然と声」, 兵藤裕己 (編) 『シリーズ思想の身体—声の巻』, 春秋社, 41～68.
- Yuasa, Ikuko Patricia (2008) *Culture and Gender of Voice Pitch - A Sociophonetic Comparison of the Japanese and Americans*. London and Oakville: Equinox.

